

『念仏鏡』に見える善導と金剛の対論の事跡について

——唐中期浄土教家の対三階教姿勢と関連して——

加 藤 弘 孝

はじめに

筆者は『念仏鏡』に対する一連の研究において、人師の崇拜化という三階教と唐中期浄土教との共通点を指摘した。すなわち三階教の創始者の信行（五四〇—五九四）が仏格を付与されると、法灯は軽視され、直接、信行に同行することの意義が重視されるようになるが、浄土教においても善導（六一三—六八二）、大行（生没年不詳）の祖師化に同様の動向が見出せるようになるのである⁽¹⁾。

三階教における祖師化が浄土教のそれに先行することから、浄土教が三階教から受容した可能性が高いと思われるが、ここである課題が生じてくる。それは『念仏鏡』において三階教批判が見られることである。すなわち唐中期の浄土教家は三階教を批判しながらも、その特色を摂取しようとしていたことになるのである。この受容背景の課題に関しては、当時の三階教の情勢を意識しながら『念仏鏡』を精査す

ることで明らかにすることができると思われる。

また『念仏鏡』における善導と金剛（生没年不詳）の論争の事跡は、何らかの寓意を含んでいると想定し得る。これも浄土教家の対外観という観点で読み解くことで、併せて解明できるものと思われる。そこで本稿では『念仏鏡』に見える三階教への対抗姿勢を論争の事跡と関連させながら考察し、唐中期浄土教における人師信仰の様相を明らかにしていきたい。

一 『念仏鏡』の「念仏対三階門」

まずは『念仏鏡』において三階教がどのような見方をされているのかという点から確認していきたい。対外姿勢が確認できるのは「釈衆疑惑論」（第十門）という篇目である。まず総説がおこなわれた後、更に六門に分けられ、それぞれの項目で、三階教、弥勒信仰、禪宗、講説僧、律宗などへの駁論がなされる。三階教への批判は「念仏対三階門」という項目で確認することができ、三階の教法に対する念仏の優越性を

『念仏鏡』に見える善導と金剛の対論の事跡について（加藤）

六つの問答を挙げながら論じている。

すなわち第一問答では、三階教においては僧床に座せず、僧食を喫せず、過齋を許すことがないが、念仏の教えではこれを許しているとする。第二問答では、三階教徒は自らを悪衆生（認悪）と見做すのに対して、念仏信者は好衆生とする。第三問答では、三階教徒は寺院と壁障を設け、他派の僧と同居に住しないが、浄土教はそうではないとする。第四問答では、三階教は形像經典を恭敬せず、四生衆生を恭敬（普敬）するのに対して、念仏教は像經を尊崇する点が異なるとしている。第五問答では、三階教は地藏菩薩を念ずるが、念仏教は阿弥陀仏を念ずる点で相違するとしている。第六問答では、三階教は一乗教ではなく、念仏教は一乗教であると述べる。また末尾には大行が三階教徒を転向させたとしている。

『釈衆疑惑門』に付設された六門には、それぞれ本章（第十一第十二門）に匹敵するほどの分量が割かれており、『念仏鏡』の撰述者たちがいかに他宗の動向を意識していたかを窺うことができる。とりわけ三階教の項目には他宗の項目と較べて多くの分量が配分されており、なおかつ冒頭に配置されていることから、三階教に対する強い対抗意識を読み取ることができる。基本的な批判姿勢としては、信仰生活、実践に関わる批判が大半を占めている。それらの一部は弾圧の直接的な原因となったものである。ただこのように三階教を批

判する一方で、沈黙する批判要素がある。そしてそれこそが祖師崇拜なのである。

二 信行の地位変動と唐中期浄土教

中国仏教史上、神格化の現象は珍しいものとされる。先学の研究に基づき概観していく。まず矢吹慶輝は、三階教内部の資料に基づき、信行の寂後、間もなくして神格化が進行し、「十地三賢」の菩薩と見做されていること、神龍二年（七〇六）の段階で「十力の仏」とまで称讃されるに至ることを指摘する。更に宗外の事例を取り上げ、懷感（生没年不詳）の『釈浄土群疑論』（通称『群疑論』）には、三階教徒が信行を「四依の菩薩」と見做していること、その著作は經典以上の尊崇を受け、末世においては諸仏以上の存在感を示すという事例を示している。また年代は特定できないものの、敦煌本に一乗菩薩である信行と無尽蔵行を同行する意義が見出せること、六道において自在に善惡両種身を受ける存在と見做されていることを論ずる⁽²⁾。

この研究成果を受けた西本照真は、敦煌写本の再検討を通して、神格化は直弟子時代に教化を意識して積極的に形成された思想的現象とする⁽³⁾。そして先学は直弟子時代における信行の崇拜化と無尽蔵事業は連動していると主張する。すなわち信行ら一乗菩薩との同行としての意義付けがあったからこ

そ、布施行としての無尽蔵事業は隆盛を極めたといふのである。⁽⁴⁾

以上のように信行崇拜は特異な現象として仏教史上に位置付けられるものである。ではこれに対して仏教界の反応はどのようなものだったのだろうか。それを窺うことができるのが、智昇（生没年不詳）の『開元釈教録』における信行の神格化への批判である。例えば智昇は教祖とその遺著への尊崇が尋常ではないという点を問題にして、三階教を邪三宝に似同すると評しているのである。⁽⁵⁾これは歴史における信行著作の禁書の理由となったものである。仏教史家として名高い智昇が違和感を覚えていることから、智昇による三階教批判の多くが仏教界の共通認識であつたのであろう。

浄土教家においても同様であり、やや時代は遡るものの懐感の『群疑論』では、信行の典籍を駁論し、聖人であるはずの信行が誤謬を犯していると批判するのである。

ここで問題となるのが『念仏鏡』における『群疑論』の参照姿勢である。『念仏鏡』では三階教批判に『群疑論』を用いている。しかし奇異なことに本書には祖師信仰に纏わる諸要素（代受苦、一乗菩薩、無尽蔵行、遺著信仰、祖師同行）への批判が一切見られないのである。第四問答においても、三階教徒が仏像、經典を軽んじる態度を普敬と関連付けて問題視するのみである。それどころか拙稿に見られるごとく、代受苦

思想を積極的に強調しているのである。⁽⁶⁾

また『念仏鏡』の「念仏得益門」（第三門）では、念仏に関して、「善道闡梨集」の二十三種の利益、「大行和上」の十種の利益、「諸經」の三十種の利益という順序で説示がなされるのであるが、人師の所説を經典に優先させており、遺書信仰の一端を窺うことができる。

決定的なのは祖師同行の思想であらう。三階教の『大乘法界無尽蔵法釈』では、

但施無尽蔵者、悉応教云、入信行禪師法界普無尽蔵。又非直信行禪師同行、亦共一切過去未來現在十方虛空法界等一切国土一切一乗菩薩同此一行。由信行禪師等一切菩薩正故、但同行隨喜見聞等四階人並正。如蛇入竹筒、筒直蛇亦直。然共信行禪師等同此無尽蔵行故、由所同正、故能同亦正、不畏邪錯。〔敦煌寶藏〕六・九五

とあり、信行と同行するだけではなく、過去未來現在のあらゆる時、十方世界のあらゆる国土の一乗菩薩らとこの一行（布施行）を同じくすることが述べられるのであるが、『念仏鏡』の「已得往生門」（第四門）においても、諸經典を典拠に「六十七億不退菩薩」が往生したことを述べ、更には、

又近來、北都有綽禪師人、又有律師。西京善道闡梨、懷感法師、大行和上、并僧法会等数百余僧人、念阿弥陀仏往生淨土。非但僧等往生、西京東京及余諸処有数箇尼師、得往生淨土。非但尼得往生、西京東都及余諸処亦有数箇白衣賢者并優婆塞等、念阿弥陀仏、臨命終

『念仏鏡』に見える善導と金剛の対論の事跡について（加藤）

時、得好境界、往生浄土。如是品類不可具説。如往生伝。此即是已往生者有。念仏法門、凡夫二乗及諸菩薩同行之教。

〔寛永十九年版〕十三丁裏～十四丁表

とあって、近来では、北都（太原）の道綽（五六二―六四五）や西京（長安）の善導、懷感、大行、並びに数百余人の僧が、阿弥陀仏を念じて浄土に往生したこと。僧らが往生しただけではなく、西京、東京（洛陽）及びその他の地で、幾人もの尼僧が浄土への往生を遂げたこと。尼僧が往生を遂げただけではなく、兩京及びその他の地でも幾人もの優婆塞、優婆夷らが阿弥陀仏を念じて、命終に好ましい対象を見聞きして、浄土に往生したという諸事例を『往生伝』に基づきながら列挙し、念仏が凡夫、二乗及び諸菩薩同行の教えであることを述べるのである。

「已得往生門」は經典と『往生伝』から、不退菩薩↓祖師↓比丘尼↓優婆塞↓優婆夷と次第する往生者の先例を示す篇目である。これは無数の菩薩と信行を同行者として挙げる『大乘法界無尽藏法釈』の同行思想と酷似する。

以上の考察により、代受苦思想、同行思想、遺著信仰など神格化の端緒は、競合関係にあった三階教の信行の神格化現象と関連すると見做すことができる。そうすると『念仏鏡』の対三階教姿勢と善導、大行の祖師化は連動している蓋然性が高まってくる。すなわち三階教徒を初めとする他学派との

対論を端緒に、対抗処置の一環として、善導、大行らの祖師化が推進された可能性が高くなるのである。

三 善導と金剛の論争

以上のような背景を踏まえるならば善導の誓願思想が、他宗派の僧侶との対論の中で、宣揚されるものであることは極めて自然な思想展開であると言えるよう。

善導の誓願に関しては、「誓願証教門」（第八門）の編目に、又善導闡梨在西京寺内、与金剛法師较量念仏勝劣、昇高座遂発願言、准諸經中世尊説、念仏一法得生浄土。一日七日一念十念、阿弥陀仏定生浄土。此是真实、不誑衆生者、即遣此堂中二像総皆放光。若此念仏法虚、不生浄土、誑惑衆生、即遣善導於此高座上即墮大地獄、長時受苦、永不脱期。遂将如意杖指、一堂中像又皆放光。此是善導闡梨立誓願处。〔寛永十九年版〕二十三丁裏～二十四丁表）

「また善導阿闡梨は西京（長安）の寺内において、金剛法師と念仏の勝劣を较量し、高座に昇つて発願して言った。「諸經の中の世尊の説によれば、念仏の法だけで浄土に生まれることができる。一日、七日、一念、十念と阿弥陀仏を念ずれば、必ず浄土に往生するのである。このことが真実であり、衆生を誑かすことがなければ、この堂中の二像が光を放つてあろう。もしもこの念仏の法が偽りであり、浄土に生まれることがなく、衆生を惑乱させるならば、善導はこの高座にお

いて即座に大地獄に墮ち、長時の間、苦を受けて永遠に出る機会はないであろう。そうして如意杖を指したところ堂中の像はみな光を放ったのである。これこそが善導阿闍梨が誓願を立てた内容である」とあり、金剛との対論の中で誓願と代受苦と真実語が示される。

対論者である「金剛法師」については、岩井大慧の論証が存在する。岩井大慧は「長安永平坊の東門の北に、宣化尼寺というのがあって、そこに金剛上人という人がおつて、頗る靈跡のあつたことを韋述の『兩京新記』が伝えていることである」と述べ、この宣化尼寺の「金剛上人」に「金剛法師」を比定するのである。⁽⁷⁾この岩井説は『兩京新記』を更に精査することで、その蓋然性を高めることが可能である。本史料の該當箇所は、

隋開皇五年、周昌樂公主及駙馬都尉尉遲安捨宅立寺門。金剛上人、雍法雅所制、頗有靈跡、有一尼常傾心供養。

『美術研究』第一七〇号、四一頁

という宣化尼寺に関する項目であり、隋の開皇五年（五八五）、周昌樂公主（生没年不詳）と駙馬都尉の尉遲安（生没年不詳）が宅を捨てて寺門を建立した経緯や、金剛上人が法雅を擁して制した所で、極めて靈驗があり、一尼が常に心を傾けて供養しているという事蹟が載録されている。ここで

重要なのは宣化尼寺に住していたという「一尼」の存在である。

この「一尼」の手がかりとしては、西本照真の成果が参照できる。すなわちそれは唐中期、宣化尼寺には堅行（六四九—七二四）という尼僧が住しており、そしてこの堅行については、三階教徒であることが確実視されているというものである。⁽⁸⁾

これら岩井大慧、西本照真の研究を本研究と連結させると、金剛に関して次のような結論が導き出せる。『兩京新記』の記事は、宣化尼寺の堅行と同時代人である韋述（七七五—）によつて開元十年（七二二）に記されたものであり（玉海）、信用に足るものである。そしてその当時の「一尼」とは、『兩京新記』撰述時の時点で存命中の堅行だと考えられる。堅行は、同寺の金剛を信奉しており、堅行が三階教徒であることから、金剛もまた三階教関係者であつたと想定し得る。恐らくは長安の三階教徒にとつて、神異の事蹟に裏付けられた精神的支柱だったのである。そして開元年間（七一三—七四二）に、大行の集団が王朝の意を受けて三階教徒を取り締まる際に、⁽⁹⁾善導が金剛を論破した事蹟が演出され、更にはそれが大行に重ね合わされていたのである。第一章で言及した大行が転向させた法師というのは恐らく三階教の指導者の立場にあつた者たちであつたと思われる。

『念仏鏡』に見える善導と金剛の対論の事跡について（加藤）

以上、『念仏鏡』研究と三階教研究を連結させることにより、『念仏鏡』が対三階教という明確な意図をもって、撰述されていることが明らかになった。これは開元年間における体制の動向と歩みを同じくしていることも注目すべきである。

おわりに

以上、三階教の動向と関連付けながら『念仏鏡』における祖師崇拜の現象を論じた。その結果、善導、大行の祖師化は、先行する信行の神格化を意識して推進された思想動向であることが明らかになった。また金剛が三階教関係者である可能性が濃厚になったことにより、その対論者の善導が三階教への対外的な姿勢の文脈のもと祖師化されていたという背景を併せて考慮すべきことも提言し得たのである。

- 1 加藤「二〇一七」三四—三五頁。
- 2 矢吹「九二七」二—五頁。
- 3 西本「九九八」一一九—一二一頁。
- 4 西本「九九八」一二—一二四頁。
- 5 矢吹「九二七」五頁。
- 6 加藤「二〇一七」三一—三三頁。
- 7 岩井「九五七」三〇三—三〇五頁。
- 8 西本「九九八」八二—八四頁。
- 9 加藤「二〇一六」一一〇—一一一頁。

〈一次文献〉

- 『念仏鏡』（寛永十九年版）加藤弘孝所蔵本
『両京新記』（福山敏男「校注両京新記卷第三」）『美術研究』第一七〇号、東京文化財研究所美術部、一九五三
『大乘法界無尽藏法積』（黄永武編『敦煌宝藏』第六冊、新文豊出版公司、一九八一）

〈二次文献〉

- 矢吹慶輝『三階教之研究』岩波書店、一九二七
岩井大慧『日支仏教史論攷』東洋文庫、一九五七
西本照真『三階教の研究』春秋社、一九九八
加藤弘孝「『念仏鏡』の時代相——大行の事跡を基軸にして——」
『東アジア仏教研究』第一四号、二〇一六
加藤弘孝「『念仏鏡』の撰述背景——『誓願証教門』に見える善導観を中心に——」『印度学仏教学研究』第六六巻第一号、二〇一七

〈キーワード〉 信行、大行、堅行、宣化尼寺、同行思想

（知恩院浄土宗学研究所研究助手・博士（文学））